

第2章 武士の活躍と信仰



木食応其と高野山



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

木食応其と秀吉

木食^{もくじき}応^{おう}其^きは、1585（天正13）年の豊^{とよ}臣^{しん}秀^{しゅう}吉^{きち}の高^{たか}野^の山^{さん}攻^せめを中止^{しんし}に導^{とよ}き、高^{たか}野^の山^{さん}を救^{きう}った僧^{そう}として知^しられています。木^{もく}食^{じき}とは、穀^{こく}物^{もつ}などを断^たち、草^{そう}や木^{もく}の皮^{かわ}などを食^くべる木^{もく}食^{じき}行^{ぎょう}をした僧^{そう}で、応^{おう}其^きは近^{おう}江^み（滋^し賀^が県^{けん}）の出^{しゅ}身^みで、1573年に38歳^{さい}で高^{たか}野^の山^{さん}へ登^{のぼ}りました。

応^{おう}其^きの活^{かつ}動^{どう}が目^め立^たってくるのは、1585年の豊^{とよ}臣^{しん}秀^{しゅう}吉^{きち}の紀^き州^{しゅう}攻^{こう}めからです。秀^{しゅう}吉^{きち}軍^{ぐん}は根^ね来^{らい}寺^じや粉^{こな}河^が寺^じを攻^{こう}めた後^{のち}、高^{たか}野^の山^{さん}にむかいました。これに驚^{おどろ}いた高^{たか}野^の山^{さん}は、応^{おう}其^きを使^し者^{しや}にたて降^{こう}伏^{ふく}しました。その後^{のち}、応^{おう}其^きは秀^{しゅう}吉^{きち}に深^{ふか}く信^{しん}頼^{らい}され、応^{おう}其^きも秀^{しゅう}吉^{きち}の政^{せい}策^{さく}を支^さえる立^た場^{ばう}となっ



応其像（興山寺蔵）

てはな^くてはな^らない存^{ぞん}在^{ざい}となっ

ていきま^す。また、秀^{しゅう}吉^{きち}も高^{たか}野^の山^{さん}を全^{ぜん}国^{こく}的^{てき}な信^{しん}仰^{ぎやう}の場^{ばう}所^{じょ}とし

ての「総^{そう}菩^ぼ提^{だい}所^{しよ}」と位^ゐ置^ち付^けていきま^す。1586年の大^お坂^{さか}城^{じやう}で

の秀^{しゅう}吉^{きち}と

の謁^{えつ}見^{けん}の折^せに、居^い並^{なら}ぶ諸^{しよ}大^{だい}名^{めい}の前^{ぜん}で、秀^{しゅう}吉^{きち}は

応^{おう}其^きのこ

とについ

て、「高^{たか}野^の山^{さん}の木^{もく}食^{じき}と思

っ

てはいけ

ない。木^{もく}食^{じき}の高^{たか}野^の山^{さん}と思

うよう

に。」と

発^{はつ}言^{げん}して

いま

す。秀^{しゅう}吉^{きち}は

高^{たか}野^の山^{さん}の金^{こん}堂^{どう}再^{さい}建^{けん}を計^{けい}画^{かく}し、

そ

のた

め高^{たか}野^の山^{さん}に

米^{こく}1万^{じりやう}石^いと寺^い領^{りやう}とし

て伊^い都^と郡^{ぐん}と大^{やま}和^と国^く宇^う智^ち郡^{ぐん}の地^ぢ3,000石^{しん}を寄^き進^{しん}して

いま

す。金^{こん}堂^{どう}の完^{かん}成^{てい}は、

1587年^{ねん}で、当^{ひで}時^な大^み和^{やう}（奈^な良^ら県^{けん}）や紀^き伊^い国^{こく}の領^{りやう}主^{しゅ}であ

った秀^{しゅう}吉^{きち}の弟^{でい}秀^{しゅう}長^{ちやう}が秀^{しゅう}吉^{きち}の名^な代^{だい}とし

て落^{らく}成^{てい}式^{しき}に出^{しゅつ}席^{せき}し

ていま

す。高^{たか}野^の山^{さん}麓^{ろく}の橋^き本^{げん}はこ

の時^{とき}期^きに合^あわ

せて長^{なが}さ230メー

トル余^{あま}りの橋^かが架^かけら

れ、こ

の橋^かが今^け日^{じつ}の

橋^か本^{げん}とい

う地^ち名^なの起^き源^{げん}にな

ったと

伝^{でん}えら

れていま

す。橋^か本^{げん}は、高^{たか}野^の山^{さん}へ

の入^{いり}口^{くち}の町^{まち}とし

て、河^か内^{ない}国^{こく}や大^{だい}和^わ国^{こく}へ通^{とほ}じ

る水^{みづ}陸^{りく}交^{かう}通^{つう}の要^{かなめ}とし

て発^{はつ}展^{てん}して

いくこ

とにな

ります。

高野山の組織と寺領

高^{たか}野^の山^{さん}には学^が侶^{くりよ}（伝^{でん}統^{とう}的^{てき}な権^{けん}威^いを持^もつ学^{がく}問^{もん}僧^{そう}）・行^{ぎやう}人^{にん}（寺^じ院^{いん}の庶^{しよ}務^むや雑^{ざつ}務^むを担^{たん}当^{どう}する僧^{そう}）・聖^{ひじり}（他^た地^ち方^{ほう}へ出^{しゅつ}向^{きやう}い

て信^{しん}仰^{ぎやう}を説^{せつ}いて回^わる僧^{そう}）の3つのグ

ループがあ

りまし

たが、

応^{おう}其^きはい

ずれ

にも

属^{ぞく}さ

ない

客^{きやく}僧^{そう}とい

う

立^た場^{ばう}にあ

りまし

た。山^{さん}内^{ない}の地^ち位^ゐは

学^が侶^{くりよ}が

一^{いち}番^{ばん}高^{たか}く、

行^{ぎやう}人^{にん}、

聖^{ひじり}とい

う順^{じゆん}で

し

たが、

実^{じつ}務^むを

担^{たん}当^{どう}する

行^{ぎやう}人^{にん}が

次^じ第^{だい}に

力^{りき}を

付^つけ

てい

きま

した。応^{おう}其^きが

行^{ぎやう}人^{にん}と

深^{ふか}い

関^{かん}わ

りを持^もっ

ていま

したので、

こ

の

後^{のち}学^{がく}侶^{くりよ}を

し

のぐ

力^{りき}を持^もつよ

うになりました。

応其が高野山麓で池の修築などの活動を集行的に行なうのは1589年の畑谷池（かつらぎ町）をはじめとして、1590年の平谷池、岩倉池、引の池（橋本市）、安楽川井（紀の川市）などがあります。1591年に高野山領の検地が実施され、秀吉から1万1,000石の所領をみとめられ、さらに1591年に1万石を与えられ、おおむね伊都郡、那賀郡の紀ノ川河南の地、貴志川以東の地の2万1,000石が高野山領となりました。秀吉は亡くなった母親のために高野山に青巖寺を建立し、応其の尽力で1593（文禄2）年に完成しました。青巖寺は、興山寺と合わせて高野山の中心的な寺院となりました。現在の金剛峯寺のある場所に東西に並んでこの2つの寺院があったのです。秀吉は1594年に高野山に登山し、亡き母親の三回忌の法事を盛大に行ない、能や連歌の催しをしています。

1600（慶長5）年関ヶ原の合戦の際に、応其は東軍方の津城や大津城の籠城軍を説得して開城させたため、徳川家康から西軍に味方したとの疑いをかけられました。そのため、応其は、後事を弟子の文珠院勢誉（行人方）に託して、近江国の飯道山に退いて1608年に73歳で没しています。

近世の高野山

その後の高野山では、文珠院勢誉が徳川家康に接近して行人方の勢力を伸ばしたため、学侶方との争いを深めました。1601年に徳川家康の裁定で、2万1,000石のうち、学侶方9,500石、行人方1万1,500石となりました。また行人方であった青巖寺は、この裁定により、学侶方の中心寺院となりました。その後1649（慶安2）年に3代将軍家光から東照宮料として300石（行人方100石、聖方200石）



金剛峯寺

の寄進を受けて、近世の高野山寺領が2万1,300石に確定しました。

学侶方と行人方の争いを裁断するため、1692（元禄5）年、幕府の寺社奉行や大目付、目付など500人余が、橋本へ来ました。紀州藩は警備のため橋本へ1,400人余、橋本から紀伊見峠にかけて930人余を配置していたとされます。この裁断によって行人方の僧が、追放440人余、遠島600人余の処分が下され、900カ寺の行人方寺院が取り潰しとなり、行人方の勢力は大きく後退しました。

高野山は近世の大名なみの領地を持っていたので、学侶方と行人方の双方に1649年に江戸への在番を命じられています。これは大名の参勤交代にあたるものでした。幕府の寺社奉行の支配を受けたので、幕府の法令なども下達されています。ただ、大名と違って自前の家臣団を持っていなかったため、騒動や一揆などが起きれば、紀州藩に頼らざるをえませんでした。例えば、1776（安永5）年の高野山寺領の一揆では、高野山の依頼によって紀州藩は、伊都郡奉行の指揮の下に地士（在村の武士）や帯刀人（帯刀を認められている農民）などを派遣しています。